

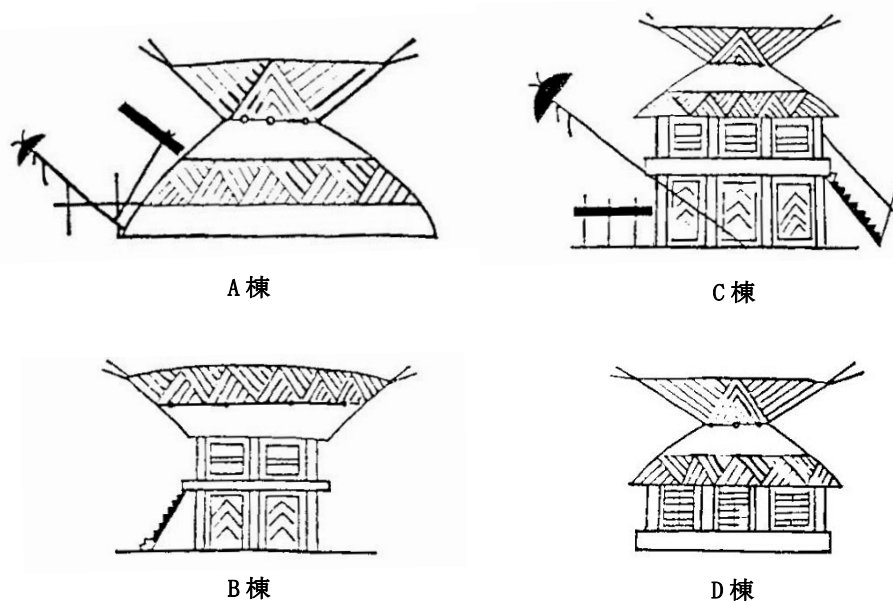
家屋文鏡蓋掲揚建物について

10408 田口紘一

はじめに

家屋文鏡は奈良県北葛城郡河合町の佐味田宝塚古墳から 1881 年に出土した。古墳は 4 世紀後半とみられ、したがって鏡は 4 世紀中ごろのものとみられている。またこの辺りは馬見古墳群に属している。家屋文鏡は他に例がなく、国宝となり宮内庁書陵部に保管されている。円鏡で径は 22.9cm。東京国立博物館にはレプリカが置かれている。おおむね、日本で作られた（倭鏡、仿製鏡）とみられており、文様は図 1 に示すように 4 棟の建物が浮き彫りになっており、日本列島の古代建築を知るうえで重要な史料となっている。しかし、その建物が何を示すものか、意見が分かれており、統一した見解はまだない。

これら 4 棟の建物の構造、使用目的について、特に意見の分かれるところの、そして重要な建物とみられるところの蓋(きぬがさ)の掲げられた二棟の建物(図 1 の A、C 棟)について論じたい。



堀口捨巳氏による鏡の家屋図の描き起こし

図 1 家屋文鏡

図 1 は、堀口捨巳氏(「佐味田の鏡の家の図について」『古美術』1948 年)の家屋文鏡の復元図である。実物は腐食などもあって、はっきりわからないところがあり、国宝である実物の精緻な写真も公開されていなかった時代、研究者によく利用されてきた。

氏は、家屋文鏡の 4 棟に、次のように名づけている。

A 棟：伏屋、 B 棟：倉、 C 棟：室、 D 棟：堂、

1. 過去の研究経過

A、C 棟に関する研究成果の概略を Wikipedia にみると、

佐味田宝塚古墳と被葬者

家屋文鏡は、奈良県北葛城郡河合町の佐味田宝塚古墳から出土した。同古墳は自然地形を利用した、東北面の前方後円墳で、4 世紀後半から末頃の築造と考えられている。墳丘長 112 メートル、後円部直径 60 メートル、前方部幅 45 メートル、後円部高 8 メートル、前方部高 8 メートル (14)。奈良盆地の西方に広がる馬見古墳群の中で中核的な位置をしめる、大型の古墳である (15)。馬見古墳群はおおきく大塚山古墳群・巣山古墳群・築山古墳群という 3 つのサブグループに分類することができるが、佐味田宝塚古墳はうち巣山古墳に属する最古の古墳である (16)。

被葬者は不明であるが (14)、馬見古墳群は、葛城郡という立地から、葛城氏の墳墓であるとする説がある。一方で、同古墳群の大部分は隣接する広瀬郡に属していることから、これらすべてが葛城氏の奥津城とは考えられず、大王家に関連するものではないかという異説も出ている (17)。和田萃は、葛城氏の本貫地は南部の掖上であり、「葛城」の名を付す神社が金剛・葛城・二上の山麓地帯に限られることなどからも、馬見丘陵が同氏の勢力範囲であったとは考えられず、これらの古墳群は大王家にかかわるものであると論じている (18)。また、大型の前方後円墳が多すぎることも、馬見古墳群と大王家の関連性をあらかず証左であるとみなされたが、これに対して小笠原好彦は、同古墳群では最古期のものである新山古墳が前方後方墳であることを背景に、これを退けている (19)。河上邦彦は、『延喜式』に高市皇子の三立岡墓、押坂彦人大兄皇子の成相墓 (牧野古墳に比定) といった、同地域の墓所を大王家に属するものとする記録があることを参考に、最北部の大塚山古墳群については大王家の墓所として、のこりの巣山古墳群と築山古墳群については、葛城氏が周辺勢力に取り込まれる中でつくった墓所であるとみなす見解をしめしている (18)。

図像の分析

A 棟

A 棟はいわゆる堅穴建物 (堅穴住居)、あるいは万葉集にみられる「廬屋 (ふせや)」「伏廬 (ふせいほ)」「田廬 (たぶせ)」を連想させる外見をしており (7)、多くの研究者が堅穴住居そのものであると断じている。一方で、太田博太郎は貴族の鏡に描かれた家屋様式をもって庶民の一般住居を復原しようとすることに慎重な姿勢を見せている (27)。低い土壇から立ち上がっており、建物の左側には棒で押し上げられた扉が描かれ (28)、その前に 2 本の短い柱に横木を渡した門のようなものがあり、長い柄の菅蓋がさしかけられている (7)。

こうした蓋の存在は、A 棟と貴人の関わりを示唆するものであり (29)、A 棟が単なる住居建築ではなく、なんらかの特殊な用途をもっていたことをあらわしている (30)。太田茂比佐はこの建物にみえる蓋が C 棟にみえるものの半分くらいの大きさであることから、A 棟は非常に巨大な建物であるという説を唱えている。また、平井聖はこの説を援用しながら、A 棟が集会場のような役割をもつ施設であったという説を提示している (29)。門のようなものについては、蓋を支えるための装置と



も考えられるが、図文の祭祀的性格から、池浩三はこれが『貞観儀式』の施設にみられるような「神服柏棚」といったものである可能性を指摘している (31)。また、近藤喜博は、これが井戸ではないかとする説を提示している (30)。

妻ころびの大きい上部の屋根の先端には千木のような交差した 2 本の線が描かれている (7)。土壇として表現されている部分については、都出比呂志により堅穴建物の屋根裾に土堤 (周提) が張り巡らされたものであるという見解が示されており、のちに群馬県渋川市の中筋遺跡や黒井峯遺跡などでそのような遺構が検出されたことから、そのようにみなしうることが明らかになっている (28)。また、東大寺山古墳出土環頭大刀の柄飾りには A 棟と類似する家屋があしらわれている (33)。池は、刀柄や鏡といった宝飾品の図案としてこのような建物がもちいられる理由として、A 棟様の建物が大嘗祭施設の前身にあたるような、いわゆる「ムロ」のような施設であったという説を提示している (34)。

C 棟

C 棟は入母屋・桁行 3 間の高床建物であり (35)、4 本の柱がみえる。床下の柱間には山状の線刻があり、やはり網代であると考えられている。また、壁には横線が引かれ、板壁の表現であるとみられる (21)。A・B 棟と同様に屋根に千木を配している。B 棟とは異なり、階段に手すりがついており (35)、階段の位置から、入り口は妻側にあることがわかる (21)。左手には 3 本の柱から構成される露台のようなものが描かれている (35)。この露台には手すりの表現はない (21)。

家屋文鏡にみられる 4 つの建物のなかで一見してもっとも立派なものであり (41)、門前には大きな蓋が立てかけられている (35)。このような様子から、C 棟は一般の建物ではな

く、貴人の邸宅や集会場、祭祀施設といった何らかの特別な建物である可能性が指摘されている（36）。

稲妻と坐像

C棟の左右斜め上に稲妻、C棟以外の建物の屋上に鳥、B・C棟の両側に樹木のような図案がみえる。

C棟の左右斜め上に直線を鉤型に曲折された図形が描かれており、これは梅原末治以来、稲妻をあらわした紋刻であるとみなされている（45）。池浩三は、家屋文鏡の雷電が建物の屋根に向けて放射されていることから、雷電は建物でおこなわれる儀式と不可分のなにかであった可能性が高いこと、古伝承において雷の表象は大嘗祭のような農耕儀式と結びついたものであることを指摘した（46）。

さらに、その右側には不鮮明ながら人物の坐像のようなものを見てとることができる。梅原はこれを「神の類」なのではないかと論じているほか（47）、辰巳和弘はこれを『日本書紀』にみえる少子部蜷嬴が雷を捉えたという話と関連付け、同建築は祭儀用の建物であり、坐像は神であるという説を提唱している（48）。池は、この坐像は雷神のようなものであろうと論じている（47）。

2015年に九州国立博物館と宮内庁がおこなった家屋文鏡のX線透過画像撮影を通じて、この複線状の角の間には点状の表現がみられることが明らかになった。この発見は、梅原以来の同図像を稲妻とする見解に疑義を生じさせるものである。加藤一郎は、こうした表現が中国において星座を表現するものとして用いられていたことを指摘するほか、これが檀もしくは圀型埴輪にみられる首長居宅といった、なんらかの構造物を省略的に表現した、平面図のようなものであった可能性についても触れている。また加藤は、X線透過画像によって得られた家屋文鏡の坐像は、対置式神獸鏡などにみられる「三分胴」の神像と同様の表現であると論じ、神像が平面図とともに描かれるこの図像は、「首長居宅の中核部の情景を忠実に表現しようとしたもの」であるとする見解を示している（49）。

研究史

家屋文鏡の研究史は、1921年（大正10年）、梅原末治が『佐味田及新山古墳研究』を通して「半円方形画像鏡」として学会に紹介したことにはじまった。ここで梅原は図案を精査し、同鏡が中国大陆からの舶載品ではなく、日本列島で製造された仿製鏡の可能性が高いことを明らかにした。高橋健自は1927年（昭和2年）の『日本原始絵画』においてこの鏡を「家屋文鏡」と命名し、構図上の特色および各建物・文様の特色について論じた。また、後藤守一は1933年（昭和8年）の『上野国佐波郡赤堀村今井茶臼山古墳』および1942年（昭和17年）の『日本古代文化研究』において、家屋文鏡および家形埴輪をもとに、古墳時代の建築様式について論じた。堀口捨己は1948年（昭和23年）に「佐味田の鏡の家の図につ

いて「出雲大社と古代住居」を発表し、各建物の細部を明らかにする線刻をおこなった(52)。

家屋文鏡は、建物を中心とする自然の情景を文様としている。しかしこれらが単に風景を描いただけのものであるとは考えがたく、全体で何らかの意味を持つものであるという前提のもと、多くの研究者が図像の解釈を試みてきた(40)。木村徳国は1972年(昭和47年)、家屋文鏡に描かれる建物は部族分立期・宗教的王者の出現期・倭国政権の成立期という各時代をあらわすものであると論じた。また、池は1983年(昭和58年)、この建物群は王位の就任儀礼のために新設されたものではないかとの推測をしている(53)。

家屋文鏡の世界観は中国の神仙思想が日本列島で再解釈されたものであり、その図像は昇仙図に由来するものであるとする説がある(54)。昇仙とはすなわち人間の霊魂が仙界にのぼることであり、昇仙図とはその様子を描いた美術のことである(55)。土居光知は、C棟にみえる露台のようなもの、鳥、蓋と樹木といった図案は、武氏祠画像石に描かれる2階建ての楼閣と朱雀のような大鳥、幡蓋柱と棧敷、扶桑樹といった図像と対応するものであるとして、家屋文鏡は古代の舞台を描いたものであると論じた。一方で、池はこの解釈について、日本列島の工人は概して中国鏡の文様を表層的なかたちでのみ受け入れており、その思想や表現内容を取り入れようとした形跡はないとして、この説を退けている(56)。小笠原好彦は、池の反論について、神獸鏡や画像鏡には神仙界の神が鑄されていることも多く、古墳時代の日本にはすでに神仙思想が伝来していたと考えるべきであり、こうした図像の一致が偶然であるとは考えがたいと、異論を呈している。小笠原は、家屋文鏡の図像は昇仙図の図案を背景とするものであり(54)、家屋文鏡の描写は、当時の首長層が神仙界においても、自らの居館とかかわりをもつであろうという思想のもと描かれたものでありと論じている(57)。

森浩一は1988年(平成元年)、浙江省上虞県で検出された屋舎人物画像鏡の図像が家屋文鏡にいちじるしく類似していることを指摘している(10)。この鏡は後漢代につくられたもので、図案は乳を中心に背面が4分割され、うち3区画に楼閣建築、もう1区画に西王母と思われる人物と、その従者が描かれるというものである。また、建物の間には白虎といった神獸が描かれる。王士倫によれば、これは崑崙山の景観を描いたものである(58)。小笠原は、屋舎人物画像鏡では紐側に建物の屋根がくるのに対して、家屋文鏡ではその逆であること、屋舎人物画像鏡においては人物や神獸といった建物以外の要素も大きく描かれていることなど、両者には相違点があることも指摘しつつ、家屋文鏡がこうした中国鏡の系譜に位置づけられるべきものであることは疑いないとしている(10)。

文献 (7) (27) (29) (31) (33) (34) (35) (45) (46) (47) (52) (56) :

池浩三『家屋文鏡の世界』相模書房 1983年

(10) (28) (48) (53) (54) (57) : 小笠原好彦「首長居館遺跡からみた家屋文鏡と
円形埴輪」『日本考古学』第9巻第13号 2002年

(14) : 佐味田宝塚古墳 | 奈良県歴史文化資源データベース | 奈良県歴史文化デ

ータベース「いかす・なら」

- (15) : 奈良県佐味田宝塚古墳等出土品 文化遺産オンライン
- (16) (17) (18) : 河上邦彦『大和葛城の大古墳群：馬見古墳群』新泉社、2006 年
- (19) : 小笠原好彦『検証奈良の古代遺跡：古墳・王宮の謎をさぐる』吉川弘文館、2019 年
- (21) (30) (40) : 望月幹夫「家屋文鏡について」『Museum』第 476 巻 1990 年
- (36) : 海野聡『日本建築史講義：木造建築がひもとく技術と社会』学芸出版社 2022 年
- (41) : 車崎正彦「家屋紋鏡を読む」小笠原好彦先生退任記念論集刊行会編『考古学論究：小笠原好彦先生退任記念論集』真陽社 2007 年
- (49) : 加藤一郎『倭王権の考古学：古墳出土品にみる社会変化』早稲田大学出版部 2021 年
- (55) 曾布川寛「漢代画像石における昇仙圖の系譜」『東方学報』第 65 巻、1993 年
- (58) 王士倫・王維坤（訳）「後漢「屋舎人物画像鏡」の図像に関する研究」『古代学研究』第 129 巻 1993 年

そのほか、木村徳国氏、鳥越憲三郎氏、辰巳和弘氏の説の要旨を次に示す

木村徳国「鏡の面とイヘ」大林太良編『日本古代文化の探求一家-』社会思想社 1975 年

「この四棟のワンセットを、次のように解釈したい。すなわち、当時、もっとも尊く・ありがたく・おそろしきもの四者を、神像のかわりに、その住居（またはかかわり深い）建築によって表現しようとしたもの」と考え、各建物について次のような性格づけを行った。すなわち A 棟はムロ（室）で、諸文献中、ムロに住んだもっとも高位の神はスサノヲであるので、そこから推理して「部族の長として支配するクニツカミのすまい」と考え、「かのキヌガサは、その勢威の大を象徴したもの」と推定している。B 棟は「来年の稲種が収められるクラであり、「ウカノミタマ（倉稲魂）を象徴しようとした建物表現、また、C 棟はミヤないしミアラカと考え「わが国にもっとも伝統的な宮殿建築の正統形式」で、その居住者を、当時の祭・政二重の権力構造から、宗教的王者と推定」している。さらに D 棟は古墳時代になってはじめて中国から輸入された大陸風の建築様式と考え「はじめて成立した倭国政権の宮廷正殿の画像」で、「従来の宗教的権力を越えて形成された世俗的権力の首長、オホキミ（大王）を象徴」するものとした。そしてこの建築の名をトノないしオホトノに宛てたいとしている。

鳥越憲三郎・若林弘子『家屋文鏡が語る古代日本』新人物往来社 1987 年

鳥越憲三郎氏は日本人のルーツを求めて中国雲南やタイ国の山岳少数民族を踏査してい

るとき、彼らの高床式建物が家屋文鏡の建物と共通していることを見出した。そして「高屋」と命名している建物（A棟）が竪穴式住居ではなく、露台のあることから、また、東大寺山古墳出土家形装飾鉄刀環頭の形状から、これは高床式住居でなければならないと確信している。そして、その建物構造を考えると、「漢民族との接触を過去にもちながら、今でもいっさい公定尺を用いず、人体寸法だけにたよって建築している少数民族を思うとき、わが国古代においても同様であったとみてよいであろう。」とし、同行した建築学科卒の若林弘子氏の建築構造分析により、人体寸法によって、しかも仮説の足場を用いずに建てる場合、垂直方向の最大の高さは人が地面に爪先立って、腕を上にいっぱい伸ばした長さ、つまり肘の長さでいえば五肘（ $0.43\text{m} \times 5 = 2.15\text{m}$ ）が限度である。その肘尺を基準にして、若林氏は家屋文鏡の四棟の建物を復元することに成功した。その結果、「四棟の建物が実際の建物それぞれの二百分の一に縮小された立面図だということがわかった」としている。

そして、A棟を「高屋」、B棟を「高倉」、C棟を「高殿」、D棟を「殿舎」と命名している。

そして、第三章に「家屋文鏡は誰のためにつくったか」をあげ、『魏志』倭人伝の記事の「宮室・楼観」を引き、楼観がC棟「高殿」にあたり、祭事権者の神祭りをする建物、宮室がA棟の「高屋」にあたり、祭事権者の住まいにあたるとしている。B棟「高倉」は穀倉、そしてD棟「殿舎」は中国建築の影響を強く受けた最新の建物としている。

最後に、家屋文鏡を贈られた祭事権者は『日本書紀』崇神紀にある、和珥の彦国葺とともに武埴安彦を撃った大彦命としている。鳥越氏は『古事記』に「丸邇臣の祖、日子国夫玖命を副えて遣わす」と武将の日子国夫玖命の名だけをあげているが「副えて遣わす」と表現していることから大彦命は祭事権者として従軍したのだと推測している。そしてその祭事権者が全軍の長の立場にあったとしている。氏は開化天皇の前は葛城王朝であったとしている。

辰巳和弘『高殿の古代学』白水社 1990年

豪族の住居跡の分析から、豪族の館は政治をおこなう建物「ハレの空間」と私生活をおくる建物「ケの空間」があることを突き止めた。そのことからキヌガサをかかげる二つの建物を豪族の住まいの「ハレの空間」と「ケの空間」を示すものと考え、C棟を「ハレの空間」の建物、A棟を「ケの空間」の建物と推定している。

2. A棟の検討

まず、小さなことであるが、堀口捨巳氏の作図の一部修正をしたい。通説で跳ね上げ式の揚げ戸とされているものの支え棒の根元が地面が堀口氏の図では地に着いておらず、宙に浮いているように描かれている。ところが、現在は宮内庁の「画像公開システム」で家屋文鏡の実物写真を見ることができる。それによってわかることは、その支えの根元は地面のラ

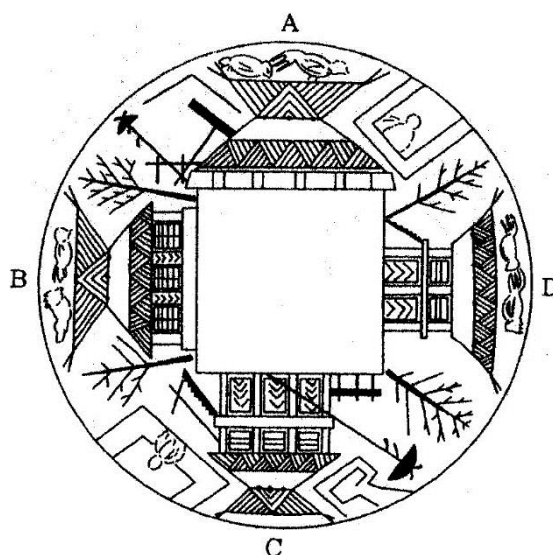
インまでしっかりと描かれていることがわかる（図4のA部）。東京国立博物館のレプリカは不鮮明であるが、よく見ればその存在が認められる。ただし錯覚して凹凸を逆に見てしまうと見えなくなる。

これはおそらく写真をみて判断されたのあろうが、そうすると、支え棒の位置も錯覚で凹凸を逆に見ると、支え棒の影の部分があたかも支え棒のように見え、位置がすこしずれてしまうのである。影のところが支え棒の位置だとすると堀口捨巳氏が示したような位置になる。

さらに、これはかなり大きなことである。建物の最下段、堀口氏の図には何も模様が記されていないが、右側の腐食の少ないところに、東大寺山古墳出土の鉄刀環頭飾りの家屋文と同じように柱を表現しているのではないと思われる幅のある縦の線が浮き彫りになってあることが確認できる。比較的狭い間隔で2本、少し開いて右端に1本あるように見える。以上の部分は、辰巳和弘氏の掲げた図（図2、『埴輪と絵画の古代学』白水社1992年。建物B、Dは逆配置）では是正されている。

A棟については奈良県天理市の東大寺山古墳出土の鉄刀環頭飾りの家屋文（図3）にそっくりなものがある。揚げ戸とみられているものや杭が誇張されているように見えるが同じ建物を表現したとみてよいであろう。A棟については、この環頭飾りの家屋文も念頭に入れながら考察することにする。

さて、四棟の大きさであるが、B、C、Dの3棟の建物については立面に柱状のものが描かれており、それから建物の幅は、B棟は2間、C、D棟は3間であることがわかる。各々の建物の柱間隔は、B、C棟の階上の部屋、及び平屋建ての部屋の高さの柱間隔との比がほぼ等しいと見られることから、この3棟の柱間隔は等しいと考えてよいだろう。



辰巳和弘『埴輪と絵画の古代学』白水社 1992年

図2 家屋文鏡



図3 東大寺山古墳出土の鉄刀環頭飾り

その柱間寸法は、神奈川県厚木市の鷲尾遺跡の奈良・平安時代の掘立柱建物 117 棟の分析結果（八幡一郎「柱間寸法」『計量史研究』1 号 日本計量史学会、1979 年 1 月 25 日）では 0.8～3.9m までばらつくが 2 m 前後のものが多くいようである。また C 棟の蓋(きかぎ)の大きさは柱間寸法に近く、古代貴人にさしかけられた蓋の大きさは、例えば、伊勢神宮の式年遷宮の時に用いられる赤紫綾御蓋は一片 170.2cm の四角の蓋、菅御笠は径 166.6cm の笠とある（段上達雄「きぬがさ 2」『別府大学紀要巻 14』2012 年）。これは人が歩くのについていく場合のものなので、C 棟のように固定の場合はもう少し大きいのではないかと考えると、柱間寸法、蓋の径とは、およそ 2 m というところで話を進めたいと思う。

A 棟にも蓋が描かれているが、C 棟のものに比べて非常に小さい。蓋がさしかけられる場所によってその径が大きく変わることは考え難いので、これは A 棟の図は建物を縮小して描いたと考えられる。A 棟の蓋の径に対する C 棟のその比は約 1.5 倍である。つまり A 棟は他の 3 棟にくらべて 3 分の 2 に縮小されて描かれたものと見られる。

そうすると、A 棟の立面の幅は 18m 程度の大きなものになる。

纏向遺跡で発掘された 3 世紀前半の大型建物が 12.4m×19.2m の中に 45 本の柱を使って建てられている（柱間寸法 3 m、2.4m）ので、それに近いものとなる。或いは、弥生時代中期の池上曽根遺跡の大型建物（東西 19.2m、南北 6.9m、柱間隔 1.8～2.3m）もおおよそ 20m の大きさである。また、弥生時代終末期の吉野ヶ里遺跡の大型建物は 12.7m 四方（3 間×3 間）である。A 棟が 4 世紀中ごろの建物とすれば奈良に住む豪族の館として、大きすぎるということにはならないであろう。蓋が掲げられているのでやはり、公的な政治的建物と考えるべきであろう。

次に、左側面に描かれている太い棒状のものが屋根の途中から斜め上方に突き出ている。それは、揚げ戸であると、ほとんどの人が判断している部分であるが、一つの疑問がある。それは戸の支え棒の位置が不自然であることである。

鳥越氏は前掲書のなかで、A 棟の堀口捨巳氏の図について「ここで問題にしたいのは、その作図の母屋の入口に揚げ戸と支え棒が描かれていることです。しかし、それは不自然です。揚げ戸であれば、支え棒は揚げ戸の先端あたりにあるはずです。また支え棒の根元も母屋から離れています。その部分が腐食のために誤解されたのでしょうか、わたしは稲妻形の雷電の図形とみるべきだと思っています」と指摘して、その書の図にはこの部分を省かれている。

確かに、その部分が揚げ戸と支え棒であったなら、揚げ戸の建物への取り付け位置は図 4 の「B」の位置になるであろう。揚げ戸はその取り付け部で回転できるような支点となる。この場合、支え棒の位置を揚げ戸の先端で支えれば、支え棒にかかる力は揚げ戸の重さの半分、回転支点にかかる力も揚げ戸の重さの半分になる。支えの位置を回転支点に近づけていって、ちょうど中央で支えれば、揚げ戸の真ん中で支えることになるので前後にバランスが

とれるので、回転支点にかかる力は理論上ゼロになる。一方支え棒には、揚げ戸の重さ全部がかかることになる。この間ならどこで支えてもさほど支障はない。ところが支え棒の位置を中央より回転支点の方に近づけると、支え棒には揚げ戸の重さ以上の力がかかるようになるのである。回転支点にかかる力も反対方向に力が増大していく。家紋鏡にみられるように支え夷棒の位置が回転支点から棒の全長の 25% の位置で支えたとすると、支え棒には棒の重量の 2

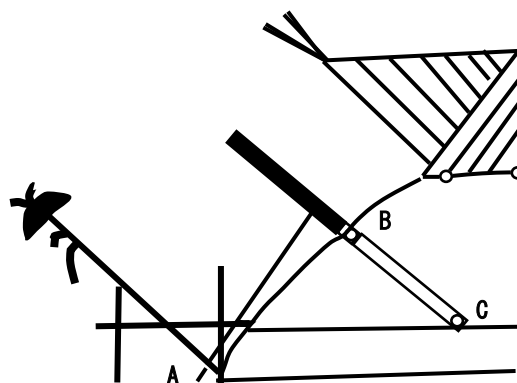


図4 揚げ戸か揚げ露台か

倍、回転支点には棒の重量と同じ力がかかることになる。適当な棒の端をつまみ、反対の手の指で棒を支えて、その指を移動するという実験をすれば、手の指やつまんだところにかかる力を、体験できるであろう。

図の支え棒で支えている物体が揚げ戸だとすると、支え棒だけでなく、回転支点にかかる力も大きなものになり、その支え位置は、とんでもない位置で支えていることになるのである。では、この図が誤りではないとすると、どう解釈すべきか。鳥越氏は、これを雷電図とみなしたが、これも疑問である。いくら錆のためと言われても、他の雷電模様とされている図柄とはかけ離れているし、ほとんどの研究者がそれを揚げ戸の支え棒であると考えている。

そこで図のようなことを考えてみた。支点の位置を下方の床まで延長するのである。揚げ戸ならぬ、揚げ露台と考えてみたのである。支点は図4の「C」の位置になる。支点がこの位置であるならば、支え棒の位置は図のとおりで支障はない。

これを揚げ露台ではないかと考えたのは、C棟の露台である。C棟の露台は厚い板条のように描かれている。それはちょうどA棟の揚げ戸といわれているものと同じ厚さなのである。それとA棟のものは揚げ戸とするには、あまりにも跳ね上げすぎという感じがする。揚げ戸ならば、水平にまで上げれば用は足す。それをさらに45度くらいにまで跳ね上げているのは不自然と思ったのである。

そのことと、上述、加藤一郎氏の「檀もしくは囲型埴輪にみられる首長居宅といった、何らかの構造物を表現した、平面図を表現したもの」という見解を合わせると次のようなこと



宮内庁ホームページより
図5 囲型埴輪の
例

が考えられるのだ。囲型埴輪の構造は居宅の周りに高い塀を設け、外から内部をみることができないようになっている（図5）。

これが揚げ露台であったなら考えたとき、壮大な光景が浮かんできた。王が露台へ出て、民衆に何かを告げるとき、民衆の側からみると、大きく跳ね上がった大きな露台が降りてきて、宮殿の出口が開き、その上から王が現れるのを見ることになる。そしてその露台の上から囲塀越しに、民衆に向かって告示をする。王のお告げの前のパフォーマンスとして、荘厳なものとなることに気づいた。

もちろん、いままでにこのような露台を跳ね上げるなどという建物はまったく出土したという報告を見たことはない。それどころか鳥越氏（前掲書）によると、露台のある建物さえ出土していないという。それは露台があるかもしれないという意識をもたずに発掘調査をしているからであるという。

図6は加藤一郎氏（Wikipedia の前掲書）が示されたところの居宅の平面図ではないかと推察された部分のX線透過画像である。

これを、加藤氏の推察のとおり、二重の囲線は、内側の線が居宅、外側の線が囲塀と考え、A棟では人物らしき像が居宅の内に、C棟では居宅の外に出ていることがわかる。そして、A棟では、人物が囲塀の外に向かって伝達するための露台らしきものが2本の線らしきもので描かれていることがわかる。図7に筆者が画像化したものを示す。

東大寺山古墳出土の鉄刀環頭飾りの家屋文を見ると、図3に示すように、支え棒で挙げて



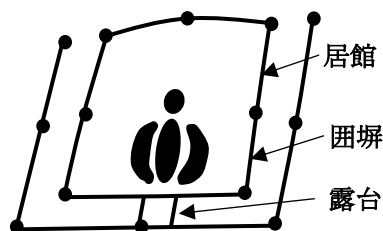
A棟の図



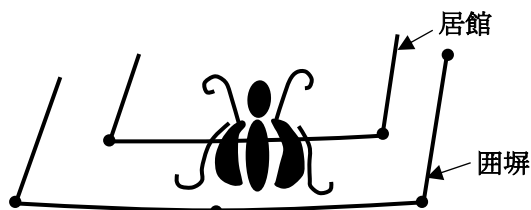
C棟の図

加藤一郎氏（前掲書）による

図6 居宅平面図とみられる部分のX線透過画像



A棟の図



C棟の図

図7 図6から作成した画像

いる部分と杭が誇張して作られているように見える。この建物の特徴はこの部分であることを強調しているように見える。

この支え棒で支えているものが単なる揚げ戸ならば、ごく平凡な構造であり、このように誇張して作る意味がわからなくなる。それは、揚げ露台とそれを支える杭と解釈したとき、揚げた時の傾きを含めてすべてのことが説明でき、疑問がすべて解消されるのである。当然、揚げ露台は扉の役目も果たす。

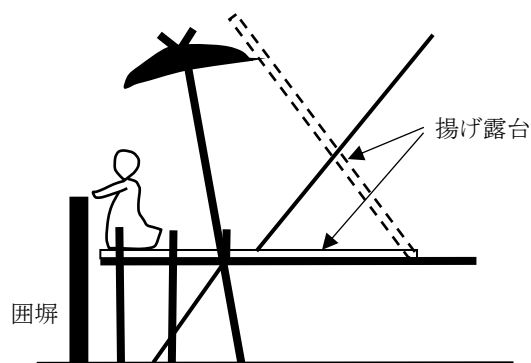


図8 露台上立つ首長

人が他人にもものを見せびらかしたいと思うものはどのようなものか。それは誰もが羨ましく思うような貴重なものか。あるいは自らが自慢したくなるようなものを発明して作ったときであろう。図8は、A棟で首長が露台上に出て堀越に民衆の決定事項を伝える様子を描いてみたものである。

大和朝廷における天皇即位時の大嘗祭の建物という意見（上述、池浩三氏）があるが、現在に伝わる大嘗祭の建物には露台付きの建物はないし、大和朝廷における天皇の行為に露台上に立って勅語を述べられたというような記事もない。露台に関してはまったく記事がない。

東大寺山古墳の大きさが全長 130m という中型の古墳で、同時期（4世紀後半）には、通称、景行天皇陵、垂仁天皇陵、神功皇后陵など 300mに達する大型前方後円墳が造営されており、東大寺山古墳の被葬者は天皇ではなく、その地方の豪族和珥氏であったと推測される。家屋文飾りの環頭鉄刀を、この東大寺山古墳に葬られている者が 2 本も所持していたことは何を意味するか。上記のような理由で露台付き建物がまったく見つかっていないとはいえ、他に露台付き建物を指すような記事も「記紀」にはない。下賜されたものであれば、他の豪族の古墳から出土することが考えられるが、現在のところそれはない。この古墳だけが複数所持していたことは、この古墳の被葬者みずからが作らせた可能性が最も高いと考えられる。

当時は自分の支配者に物事を伝える手段は文書ではなく口頭であった。文字はあったかもしれないが文字は漢字であり、文は漢文の中国語であり、渡来人によって管理され、倭人の家臣を含めて、一般民衆で文字のわかる人はほとんどいなかったであろう。

この古墳の被葬者は、会議で決められた達示事項を、自ら一般民衆に口頭で伝えることを考えたのだと思う。そのための施設として建物の正面に露台を設けた。そして、その出入口の戸に露台を利用することを考えたのだと思う。先に述べたような絶大な効果が得られるからだ。

3. C棟の検討

C棟は、A棟とならび、蓋がさしかけられている建物である。C棟は左側に露台、右側に階上へ上る梯子のようなものが描かれている。また、それに手摺を表しているようにみえる一本の棒状にものが浮き彫りにされている。露台と梯子で上る階上とは大きな段差があるので、これは高床の二階建ての建物であることがわかる。露台の台の部分はA棟と違って厚い板のように見える。それはA棟の揚げ戸と一般に言われているものと同じ厚さであることは先に述べた。A棟のものが揚げ露台ではないかという考えも、このことから浮かんだのである。

さて、A棟が王のもっとも自慢する所の建物、すなわち政治を行う建物だとすると、C棟は何であろうか。当時の政治形態を考えると、当時は祭政政治であったことがうかがえる。

実際に政治を行う政務王と祭祀、つまり、これから行うことを神にその是非、あるいは吉凶を伺う祭祀王とがいた。C棟は、祭祀王の祭祀を行う建物と考えられる。この考えは多くの人がすでに唱えている。木村徳国氏の「宗教的王者」、鳥越憲三郎氏の「祭事権者」がそれである。両者とも祭政政治を念頭に入れられている。『魏志』倭人伝において、乱れていた倭国をまとめるために連合国家の共通の祭祀王として選ばれたのが卑弥呼であった。

C棟の建物の構造

図1のC棟の図において、左側に手摺付きの梯子があり、最高階に登れるようになっている。そして右側に描かれている露台はそれよりも下の階にある。

これが祭祀王の祭祀を行うための建物であったとするとどういう構造なのだろう。家形埴輪に三階建ての埴輪はあるが、もちろん露台はない。

『日本書紀』神功皇后紀に夫である仲哀天皇の死を宣告した神の名を知るために行なった行為に次の一節がある「皇后は吉日をえらんで斎宮に入り、自ら神主とられた。武内宿祢に命じて琴を弾かせ、中臣烏賊津使主を呼んで、審神者(さにわ)とされた」。祭祀王が神託、つまり神の意向を伺う行為としていわゆる「神憑り・憑依」がある。祈祷をしているときに祭祀王の意識が失われ、神が代わりに降りてきて人格を支配し、祭祀王の口から神の言葉が発せられる。祭祀王自身はその記憶がないので、祭祀王の口から発せられた言葉を審神者が聞くのである。神の神託を受けるには、祭祀王と審神者の一組が必要である。『魏志』倭人伝においても、女王卑弥呼は「王となって以来、見る者少し。・・・ただ、男子一人有りて、飲食を給し、辞を伝へ、居所に出入りす」とある。この「男子一人」こそ審神者と考えられる。

審神者は祭祀王の発する声をどこで聞くのだろう。祭祀王が神憑りになったとき、意識が失われ、いわゆるトランス状態、脱魂状態になるがその姿は種々あり、激しいものでは全身痙攣というものもあるという。おそらく、祭祀王に神託を依頼する者にとっては、祭祀王が全身痙攣の状態で言葉を発する光景が真に神が降りてきていると感じるであろう。そうであるならば、祭祀王としては、その姿を誰にも見られたくはないであろう。たとえ審神者であ

っても。そういうことを考えたとき、この二階建ての建物の構造が鮮明に理解できた。

祭祀王は二階に、審神者はその階下の露台のある階に居るのだ。二階の床の一部は格子などになって一階と通じ、一階の室からは声は聞こえるが二階の室内を見ることができないようになっているのだと思う。「見てはいけない」となると無性に見たくなるのが人の性で、壁で仕切っていても、つい穴をあけてのぞいたりする。階下ならば穴の真上だけしか見えず上階の室内を広く見渡すことはできない。祭祀王が神託を受ける場所として理想的な構造といえよう。この建物の場合、階下で神託を聞いた審神者は二階へ上る階段の方向とは反対側に設けられた露台に出て、他の者にその内容を伝達したのだと推察できる。

さらに、C棟には蓋と建物のあいだに雷光（稲妻）が描かれている。他の三棟には屋根の上に鳥が描かれている。池浩三氏（前掲書）によれば、雷光も鳥も天上と地上をつなぐ雷神の表象であるという。つまり、雷光や鳥の本性は雷神だとしている。そして雷神は「稲妻」という言葉があるように穀霊と考えられている。C棟は建物が高く屋根の上に鳥を描く余地がなかったため代わりに雷光を描いたとも考えられるが、C棟が祭祀者の神託を受ける場所であり、そこで行われる祭祀者が神憑るという激しい行為には、優しい鳥よりも、激しい雷光とともに雷神が降臨している、とした方がより適しているように思える。四棟の建物はいずれも雷神に守られた神聖な建物として描かれたのであろう。

4. 家屋文鏡はだれが作ったのか

家屋文鏡の作者については、前述の鳥越憲三郎氏の見解がある。すなわち、家屋文鏡が奈良盆地南西部の葛城氏の居住地域であった馬見古墳群の佐味田宝塚古墳から出土し、一方の環頭飾りの家屋文付きの鉄刀は、奈良盆地北東部の和珥氏の居住地域であった大和古墳群の東大寺山古墳から出土していることから、『日本書紀』崇神紀に登場する大彦命と和珥氏の先祖彦国葺との関係に注目されている。氏によると、大和朝廷のはじめのころの政務王すなわち天皇の多くは次男で長男は祭祀に就いていたという。第二代綏靖天皇（第一子は神八井耳命）、第四代懿德天皇（第一子は息石耳命）、第三代、第五代は天皇となった子しか記されていないが妃の生んだ第一子が祭祀に就いていたのであろうと推察しておられる。特筆されるのが第七代孝霊天皇で、ここでも後は第八代孝元天皇一人だけを生んだ。しかし二人の妃が生んだ者には三人の男子がみえる。そのなかの、彦五十狭芹彦命と稚武彦命が吉備国の征討に派遣されるが、当時の戦いには必ず祭事権者が従軍したと言われる。このとき軍兵を率いたのは稚武彦命で彦五十狭芹彦命は孝元天皇の兄にあたり、第一子としての祭事権者であったと見られるとされている。古代の戦争には宗教観念が社会的活動の因子として重視され、出発の日をはじめとして、戦闘開始の時期など、すべて祭事権者による神意のもとに行なわれたと言われる。

そして孝元天皇は、后、薨色謎命との間に第一子大彦命、第二子開化天皇を生んだ。大彦命は第一子であるから開化天皇の祭事権者であったと考えられる。そして崇神十年、大彦命

の異母弟の武埴安彦の謀反が起こった。その時、大彦命と和珥氏の先祖、彦国葺を遣わして埴安彦を討たせた、とある。『古事記』では武将の日子国夫玖命の名だけあげているが、その武将を「副えて遣わす」としているのも、大彦命も祭事権者として参戦したことはあきらかだとされている。大彦命と彦国葺命のコンビ、この祭政権者の組み合わせは特異なものである。通常は兄弟で組むのに、大彦命と彦国葺は兄弟ではない。それは、大彦命の異母弟埴安彦を討つために兄弟を実行役にするに忍びなく臣下の彦国葺をあてるという特別に編成されたものであることがわかる。そして、鳥越氏は開化天皇以前は葛城王朝であったとしているのである。だから、大彦命は葛城氏であり、葛城氏の領地の馬見古埴群にその墓があっても不思議ではないと言われる。

鳥越氏の結論は、「大彦命は前述したように、葛城王朝最後の開化天皇の兄にあたる祭事権者であった。その彼が家屋文鏡と関連をもつ人物だと考えたいのである。・・・以上、葛城王朝の系譜にもとづいて考証してきたが、『日本書紀』にのせる系譜は天皇を中心としたものであった。そうした系譜になったのは、祭事権者が聖なる人として独身を守り、次代への相続は第二子たちへ継承されるため、血縁的にたどると第二子からまたつぎの第二子への系統譜ができるからである。その上、後世の歴史編纂者が、古代においては祭事権者が政事権者よりも上位にあったことを知らなかったためである。家屋文鏡はその祭事権者の就任のときか、それに類する何かの祝いにあたって、それを祝福して贈ったものとみてよからう。そのため祭事権者が神祭祀をする『高殿』と、住まいの『高屋』の二種を中心にした鏡をつくったのだと考えたいのである。」としておられる。

鳥越氏の「葛城王朝説」は前掲書では説明されていないが、『日本書紀』には、二代綏靖、五代孝昭、六代孝安天皇の宮が葛城（御所市）、四代懿徳、八代孝元天皇の宮が軽（橿原市）、七代孝安天皇の宮が黒田（磯城郡田原本町）と政治を行った宮が奈良盆地南西の葛城の領地となっていてところから、主張されているのであろう。

鳥越氏の考えはここまでだが、もう少しこの考え方を進めて見よう。

鳥越氏の「開化天皇の前は葛城王朝」説は正しいのだろうか。それは第二代から第九代までの天皇を実在と見ているからで、考古学的には葛城氏の古埴とみられる馬見古埴群は四世紀末から五世紀にかけてのもので、葛城氏の活躍もそのころと考えられるのである。そして佐味田宝塚古埴はその初期の四世紀末頃と推定されている。また、東大寺山古埴も同時期と推定されている。私は過去の論文において、真の歴史は、『魏志』倭人伝の卑弥呼・台与は天照大神であり、台与が神武に命じて北部九州から奈良纏向へ東遷を行い、台与の子応神が初代天皇につき祭祀王となった。政務王は神武（＝崇神）が担当した。ところが継体天皇のとき、応神の五世孫という振れ込みを信じ、皇位継承を承認したが、後に「帝紀・旧辞」の編纂時にそれが誤りであったことがわかった。『魏志』倭人伝が伝わり、応神の母親である神功皇后、彼女が『魏志』倭人伝の伝える台与と考えられるその人物が3世紀中ごろの人だとわかったからだ。

このことをどう繕って歴史書を編纂するか苦慮した結果、継体天皇の五世代前を応神天皇とし、その代わりに応神天皇と継体天皇の間の系譜は不記載に、そして応神が継体の真の五世代前の天皇・イザサワケとの「名の交換」など、真の歴史も読み解けるような逸話を盛り込んだ、と考えている。したがって、初代から 14 代仲哀天皇までは真の天皇（祭祀王）ではないと考えている。また、その間の政務王も初代が神武＝崇神で、第二代が垂仁（これは『魏志』倭人伝から判明）くらいしかわからず、残りは記憶に残る人物を適宜並べたのではないかと推量している。そうであるから、大彦命が彦国葺と組んで武埴安彦を討ったという話は伝わっているけれども、それが何時の事なのかは判明せず、崇神朝にその話を組み込んだと考えている。

ともかく、同じ図柄をもつ家屋文鏡と家形環頭装飾の鉄刀が四世紀末頃の葛城の佐味田宝塚古墳と天理市の東大寺山古墳から出土し、葛城氏に属すると見られる大彦命と和珥氏の属すると見られる彦国葺の組み合わせの話が伝わっているので、それが結びつく可能性は十分にあると思うのである。そして祭政担当者の組み合わせとしてそれが通常ではない特別の組み合わせであったことも想像できる。

また、大彦命が四世紀中頃あるいは前半の人物であったことは、埼玉県行田市の稲荷山古墳出土の鉄剣に金象嵌された銘文に「上祖名をオホヒコ」そして七代目に「ヲワケの臣」と記し、「世々、杖刀人の首と為り、奉事し来たり今に至る。ワカタカルの大王の寺、シキの宮の在る時」と、「ヲワケの臣」は雄略天皇の時代の人物であり、その七代前がオホヒコであると記している、系譜は「その兄」と父子関係になっているが、兄弟継承など複雑なことを省いて単純に「その兄」と表現したのならば、この時代、一代の平均在位年数は十数年くらいであったろうから、七代前はおおよそ 100～120 年前ということになる。雄略天皇は『日本書紀』では、その在位は 457 年から 479 年となっており、大彦命はその 100～120 年前ということならば、四世紀中頃となって佐味田宝塚古墳出土の家紋鏡の推定製作年代と一致するのである。また古墳の規模も中型であり、天皇ではないのであるから適切な規模と考えられる。

以上のことを考慮に入れると、大彦命という祭事権者が自分の兄弟を討つために抜擢した和珥氏の彦国葺は、才能あふれる武将であったのであろう。その彦国葺は自分の政事を行う建物に揚げ露台を設けるという発明をした。上級家臣を集めた会議で決まったことを即座に下級の家臣たちや民衆に告示するためである。露台は建物を取り巻く囲いの上から告示を行うためのものだ。それが自慢で家形環頭装飾の鉄刀を複数作った。そして大彦命へ献上する鏡にその図柄を刻むことを考えた。自分の政事を行う建物に露台を設けることはもちろん、大彦命の祭事を行う建物にも審神者が外部へ報告するための露台を描き込んだというのが真相ではないかと思うのである。実際に大彦命の祭事の館に露台があったかどうかは別問題だと考える。祭事権者がその結果を報告する先は政事権者であるからだ。

もっとも大彦命が祭事だけを行う人物であったかどうかは、これまた疑問で、この武埴安

彦を討つときは、討つ相手が異母弟なので彦国葺の助けを借りたが、それ以外の時は祭政両者を兼ねた人物だったのかもしれない。このところは伝承の世界なので、これ以上の詮索はあまり意味がないことになるであろう。

私の結論としては、和珥氏の彦国葺が自分の政事を行う建物に露台を設け、建物を囲う堀越しに外の民衆に告示することを思いついた。そしてさらに、その露台を上方へ傾け、戸の代わりにすることを考えた、と推察する。大きな露台を上へ傾けると遠くからもその偉容が見える。会議の結論が出て、民衆に告示するときは、跳ね上げられた露台を下す。民衆側からみれば、高く揚がった露台先端が徐々に降りてきて、建物の入口が見え、そしてその中から王がお出ましになるのだ。王の告示のパフォーマンスとして荘厳な空気をもたらす。その発明が自慢で、刀の環頭にその建物の形を、揚げ露台を強調して作り込んだ。そしてその露台を設けた建物を描いた家屋文鏡を作り、世話になった大彦命に贈った、と考える。露台を設けた建物は彦国葺独自の発明であったが、それは流行らなかった。天皇をはじめ、有力豪族は告示にあたり、別の場所でもっと厳粛な形で行っていたからである。

また、C棟は祭祀権者の祭祀、つまり、神託を受ける場所で、上階に祭祀権者が、階下の露台のある階に審神者が待機し、祭祀権者が神憑りして発する言葉を階下で審神者が聞き取る仕組みになっている。審神者であっても祭祀権者の神憑り時の姿をみることができないようにするためである。

また、大彦命が孝元天皇の子でないことは、稲荷山古墳出土の鉄剣に記された系譜が大彦命で止まり、その前の代が記されていないことから証明される。大彦命が孝元天皇の子であったなら、どうして鉄剣の系譜が孝元天皇まで遡らないのか説明できない。鉄剣の持ち主にとって、孝元天皇の子孫であるのと、単に大彦命の子孫であるのとでは雲泥の差なのであるから。つまり、第二代から九代までの天皇は架空という通説を覆すことはできない。

この間の天皇群が葛城を本宮としていることは、「帝紀・旧辞」の編纂者・蘇我馬子が葛城氏から分立した家系であることから、大和朝廷発足時の天皇群を埋めるために架空の葛城系天皇を創作したと考える。つまり、天皇家の祖は葛城系であったとしたのだと思う。